

An illustration showing the back and buttocks of a person wearing a grey t-shirt and white briefs. The person's right hand is visible, pulling at the hem of the t-shirt. The background is black. Overlaid on the image is Japanese text in a vertical column.

連続殺人犯に笑われながら
パンツ一丁の男たちは
子種をまき散らす

俺は今日が初就任の刑事。

市民に親しまれる交番のお巡りさんになりたかったのが「刑事になれ
じゃないとクビにるす」と署長に脅されて渋渋、刑事になる道へ。

あいにく刑事になれるだけの資質があつたし、真面目なほうだから、
訓練や試験で手をぬくことができず、みごとに一発合格。

「俺の目に狂いはなかった！」と俺よりはしやぐ署長に送りだされた
ものを、配属先ではえらいことが。

連続強盗事件と連続殺人事件二つが横行して、刑事課は大忙し。

「新人の教育なんかしていられるか！」とまるで歓迎されず、ただ一

応、五才年上の先輩が教育係に。

アラサーながら、どこか昭和の匂いがして昔気質っぽく、ふだんから凄みがあつて見た目もいかつい剛川先輩。

「現場百閒とか古くさいやり方を押しつけてこないかな」と不安だったなれど、刑事課のなかで一番、頭の切れるエースらしい。

その腕を見こまれて、二つの事件の捜査を任され、忙殺されている先輩だけに挨拶もそこそこ「おまえには連続殺人のほうを担当してもらう」と説明を。

半年前から裸にパンツをはいただけの男の死体がつづけて発見されているという。

どの遺体もさんざん射精したのと、レイプされた痕跡あり（ただし相手の精液は見つからず）。

死体は被害者が住むマンションの地下室に放置。

死因は心臓発作。

注射針の跡が腕にあったので薬物により殺されたと考えられるが、検査では判明せず。

不可解な殺され方以外、被害者にとくに共通点はなく、同性愛者でもなかったとのこと。

「まあ、おそらく犯人は同性愛者だろうと見立てている。

ノンケに惨いしうちをされて怒りのあまり狂い、復讐をしているのか。

同性愛者なのを隠しているやつが、あまりに普段、自分を抑圧していることから、反動で暴走をしているのか」

これまでに頭を絞ったろう先輩方らの考えに「いや、でも」と口だししようとしたら「よお、みんな、がんばっているか」と車椅子に乗った男が登場。

きよとんとする俺に、剛川先輩が紹介したことには「この人は刑事課で断トツの腕利きだった古谷さん」と。

「どうも」「いい顔つきの新人だな」と挨拶を交わし、俺がちらりと足を見たのに気づいて「これはなあ」と苦笑。

「ある事件、猟奇殺人を調べていたら、犯人に目をつけられて殺されかけたんだよ。」

一命をとりとめたが、下半身がほとんど動かなくなつてな。

それから警察を辞めて、今は探偵業をしている」

「・・・べつに車椅子でもかまわないから、刑事をつづけければよかつたのに。」

犯人と格闘できない体じゃだめだつて聞かなくてな。

ていうか、車椅子だと探偵業のほうが難しいんじゃないですか？」

「まあ、そうだけど、逆に怪しまれないつてのもあるんだよ。」

一見、社会的弱者だからな。

調べている相手が俺を目に止めたとして『あんまり見てはいけない』

とすぐに顔を逸らしたりする。

まあ中には『手伝いませうか』と声をかけてくるから厄介だが」

放っておくと、長話になりそうだったに「あ、あの、それで古谷さんはなんの御用で？ 捜査の手伝いとか？」と割ってはいる。

「ああ、じつは古谷さんの依頼者をはじめの犠牲者なんだ。

だから、暇なときに警察にきてもらって、あらためて話を聞いたり、まあ、捜査についての意見を聞かせてもらっている」

「んな大層なもんじゃなく、爺が戯言を垂れ流しにきてるだけだ。ほれ、俺のことなんか気にせず、新米刑事さんよ、さつき云おうとしてたこと云いな」

なかなか気さくな人なれど、元ベテラン刑事のまえでは緊張せずにいられず。

昭和臭のする剛川先輩が目を光らせてもいるし。

「あまりにハラメントがひどかったら署長に泣きつこう」と一呼吸置いて告げる。

「主犯は同性愛ではないと思って・・・」